

# うしろ姿とせなか

森田宗一

還暦をふたとせ過ぎてようやく

かすかに己がうしろ姿見ゆ

これは昨年私の六十二歳の時の述懐である。自分がどんな生きざまをしているか、どのように人に影響を与えているか、その大事なことが、人生の秋になってようやくかすかにわかるものかということは、愚にも寂しいことである。しかしほっとすることもあるように思われる。

私は三十数年非行少年と呼ばれ問題児といわれる少年少女とつき合い診断処方をしてまいったが、まさに「子は親の鏡」であり、「うしろ姿で子は育つ」ものだということを教えられた。そして自分は裁判官としてまた教師のはしくれとして、何よりも人の子の親として、どういううしろ姿を見せて来たのであろうか。ハッとしたりドキンとしたり、時にはホッとしたりの歳月を重ねて来たように、痛感させられるのである。

倉橋惣三先生が、家庭教育の要諦三態として、「ま向き、横顔、うしろ姿」をいつも説かれたことは、あまりに有名である。そして、うしろ姿の力こそ、おそらく真向きで説き、横顔で教えるよりも、さらに深い何かをわが子に与えるものであることを、くりかえし説かれたのである。そのことのまことに真実であることを、私は沢山の実例から学んだ。人生の旅路において、歳月を重ねることに消えることのない思い出となり、心の支柱となるのは、幼い頃からの親や教師のうしろ姿（その生きざま）にほかならないと思うわけである。

その「うしろ姿」のうち最も具体的なのが「背中」ということであろう。幼いころ、おんぶしてもらい、もたれかかった母の背、トントンたたいてあげた父母や祖母の背中、それは年とともに私どもにはなつかしく思い出されるものである。思えば人間の「せなか」ほど人生の歴史が彫り刻まれる

場所はないともいえよう。日本人の古い習慣として西洋人とちがうのは、母が子どもを背におんぶして働き、遠くへ出かけたたりすることである。今は西洋式になって、そういう母子の姿を見ることも少なくなつた。そこには育児法や母子関係の上での問題点も指摘できることだろうが、西欧にないよさと深い意味のあつたことも忘れてはいけないのではないかと思う。むしろ最近欧米の心理学者や教育者の中に、日本人のその習慣のすばらしさを賞讃する人も少なくない。いわゆるスキんシップの意味で評価する人もあるが、もっと深い人生の親と子の関係としてとらえている人もある。

さて、私が知っているケースでこんなのがある。仮りにA子と呼ぼう。A子は頭がよく鋭い子だった。小学上級生の頃から母親と緊張関係がつづきうまくいかなくなった。中学に入ってから、一層きびしく、家出したり、すごい反抗の態度をとることも、しばしばだった。

ある日A子は学校から帰ると母の声がかきこえない。いつもガミガミキンキン耳につらくきこえた母の声がない。どうしたのかと思つてそつと母の部屋に入つてみると、母はじつと机に向つて読書しているらしい。何かの本に感動して涙ながらに読んでいるらしい。その後姿を見てハッと心うたれその

ままそつと自分の部屋に来てしまった。その後、いつになく母と一緒に風呂に入ることがあつたという。A子と母親にこつては、珍しいことだった。何か白いものが見える母のうしろ髪と背中を見て、思わず母の背に体をよせ、そして母の体に石けんをつけ洗つてやつた。母はにっこり笑つて気持ちよさそうにA子そのままに背中を洗わせていたという。

そういうことがあつてから、A子と母親との悪い緊張は急速にはぐれ、融和して行つたという。

まさにこの母と子は、うしろ姿と背中での出会いで一切問題は解決したといつてよい。心温まる事実だと思ふ。

始めに短歌で心境をのべたように、己のうしろ姿は、なかなか見えないもの、歳月のかかるものだと思う。同様に自分の背中によく見えないものだと痛感する。しかしそれを人は見て、判断もし影響も上げる。こわいような感さえる。

この文の最後を、何年前か、鳥取の砂丘を見て感動した時の句を以て結びたいと思ふ。

母の背にかも似てまわし春砂丘

(元家裁判事・弁護士)